

機械屋の数学 第 10 回 補足資料

・球座標系におけるラプラス方程式の一般解

本特集「機械屋の数学」では、偏微分方程式の解法として、演算子の固有値問題として考えることにより、変数分離法がうまく使える条件について説明してきた。ここでは、一般的によく用いられる変数分離法により、球座標系におけるラプラス方程式の解を求める方法について示しておく。

ラプラス方程式 $\nabla^2 f = 0$ を、球座標系で表記すると、次式となる。

$$\frac{1}{r^2} \left[\frac{\partial}{\partial r} \left(r^2 \frac{\partial f}{\partial r} \right) + \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \frac{\partial f}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2 f}{\partial \varphi^2} \right] = 0 \quad (\text{A-1})$$

与えられた境界条件に対して、この方程式を変数分離法により求める方法を以下に示す。

変数分離法では、方程式 (A-1) の解を、

$$f(r, \theta, \varphi) = R(r) \Theta(\theta) \Phi(\varphi) \quad (\text{A-2})$$

とおく。この式を、式(A-1)に代入し、全体を $R(r) \Theta(\theta) \Phi(\varphi)$ で割ると次式を得る。

$$\frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) + \frac{1}{\Theta \sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \frac{1}{\Phi \sin^2 \theta} \frac{d^2 \Phi}{d\varphi^2} = 0 \quad (\text{A-3})$$

この式を $\Phi(\varphi)$ を含んだ式とそれ以外に分け、これまでと同様にして、定数 λ を用いて、次式のように置く。

$$\frac{1}{\Phi} \frac{d^2 \Phi}{d\varphi^2} = - \left[\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) + \frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) \right] = -\lambda \quad (\text{A-4})$$

$$\text{したがって,} \quad \frac{d^2 \Phi}{d\varphi^2} + \lambda \Phi = 0 \quad (\text{A-5})$$

$$\frac{\sin^2 \theta}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) + \frac{\sin \theta}{\Theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) - \lambda = 0 \quad (\text{A-6})$$

式(A-5)より、

$$\Phi(\varphi) = C \cos \sqrt{\lambda} \varphi + S \sin \sqrt{\lambda} \varphi \quad (\text{A-7})$$

と置くことができ、

$$\Phi(\varphi + 2\pi) = \Phi(\varphi) \quad (\text{A-8})$$

の関係をを用いると、

$$2\pi\sqrt{\lambda} = 2\pi m \quad (m = 0, 1, 2, \dots) \quad (\text{A-9})$$

すなわち、

$$\lambda = m^2 \quad (m = 0, 1, 2, \dots) \quad (\text{A-10})$$

$$\Phi_m(\varphi) = C_m \cos m\varphi + S_m \sin m\varphi \quad (\text{A-11})$$

を得る。また、 $\lambda = m^2$ を(A-6)に代入し整理すると、

$$\frac{1}{\Theta \sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) - \frac{m^2}{\sin^2 \theta} = - \frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) = -\mu \quad (\text{A-12})$$

とすることができる。したがって、

$$\frac{1}{\Theta \sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) - \frac{m^2}{\sin^2 \theta} = -\mu \quad (\text{A-13})$$

$$\frac{1}{R} \frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) = \mu \quad (\text{A-14})$$

(A-14)式は、

$$\frac{d}{dr} \left(r^2 \frac{dR}{dr} \right) - \mu R = 0 \quad (\text{A-15})$$

すなわち、

$$r^2 \frac{d^2 R}{dr^2} + 2r \frac{dR}{dr} - \mu R = 0 \quad (\text{A-16})$$

となる。この式は、 r のべきに関して、各項が同じ次数になっており、オイラー型の微分方程式と呼ばれ、 $R(r) = r^n$ の形の基本解を持つ。 $R(r) = r^n$ として代入すると、

$$\{n(n-1) + 2n - \mu\} r^n = 0 \quad (\text{A-17})$$

$$\text{すなわち,} \quad n(n-1) + 2n - \mu = 0, \quad (\text{A-18})$$

$$\therefore \mu = n(n+1) \quad (\text{A-19})$$

の関係を満たす n を選べば、常微分方程式(A-16)の基本解となるのがわかる。 $\mu = n(n+1)$ として、式(A-16)に代入すると、

$$r^2 \frac{d^2 R}{dr^2} + 2r \frac{dR}{dr} - n(n+1)R = 0 \quad (\text{A-20})$$

となる。もう 1 つの基本解も求めるため、 $R(r) = r^p$ とおき、式(A-20)に代入すると、

$$(p-n)(p+n+1) = 0 \quad (\text{A-21})$$

を得る。したがって、 $p = n, -(n+1)$ 、すなわち r^n と $r^{-(n+1)}$ が基本解となり、

$$R_n(r) = A_n r^n + \frac{B_n}{r^{n+1}} \quad (\text{A-22})$$

と表すことができる。さらに、 $\mu = n(n+1)$ を式(A-13)に代入し、整理すると、

$$\frac{1}{\sin \theta} \frac{d}{d\theta} \left(\sin \theta \frac{d\Theta}{d\theta} \right) + \left\{ n(n+1) - \frac{m^2}{\sin^2 \theta} \right\} \Theta = 0 \quad (\text{A-23})$$

となる。ここで、 $\zeta \equiv \cos \theta$ 、 $P_{nm}(\zeta) \equiv \Theta(\theta)$ と置き、

$$\frac{d\zeta}{d\theta} = -\sin \theta \text{ となることに注意して式(A-23)を変形すると、}$$

次式を得る。

$$\frac{d}{d\zeta} \left((1-\zeta^2) \frac{dP_{nm}}{d\zeta} \right) + \left\{ n(n+1) - \frac{m^2}{(1-\zeta^2)} \right\} P_{nm} = 0 \quad (\text{A-24})$$

この式は、ルジャンドルの陪微分方程式と呼ばれ、スツルム・リウビル型の形をもっており、得られる解 $P_{nm}(\zeta)$ (ただし、 $0 \leq m \leq n$) は直交関係を満たす。式(A-23)は、2階の微分方程式であるから、2種類の独立した関数系を持っており、それぞれ第 1 種ルジャンドル陪関数 P_{nm} 、第 2 種ルジャンドル

ル陪関数 Q_{nm} と呼ばれる。これらのうち、 Q_{nm} は、 $\zeta = \pm 1$ に
対数的特異点を持つため、 $\zeta = \cos \theta$ ($0 \leq \theta \leq \pi$)により記述
される(A-24)の一般解は、第1種ルジャンドル陪関数 P_{nm} に
よる級数の形式で与えられる。

以上より、球座標系のラプラス方程式

$$\frac{1}{r^2} \left[\frac{\partial}{\partial r} \left(r^2 \frac{\partial f}{\partial r} \right) + \frac{1}{\sin \theta} \frac{\partial}{\partial \theta} \left(\sin \theta \frac{\partial f}{\partial \theta} \right) + \frac{1}{\sin^2 \theta} \frac{\partial^2 f}{\partial \varphi^2} \right] = 0$$

の一般解は、

$$f(r, \theta, \varphi) = \sum_{n=0}^{\infty} \sum_{m=0}^n \left\{ \left(A_n r^n + \frac{B_n}{r^{n+1}} \right) P_{nm}(\cos \theta) \times \right. \\ \left. (C_m \cos m\varphi + S_m \sin m\varphi) \right\} \quad (\text{A-25})$$

となる。

本文で挙げた例題の場合は、一様流中の変形物体を考えて
おり、軸対称問題を扱っている。軸対称問題では、式(A-25)
において $m=0$ として、

$$f(r, \theta) = \sum_{n=0}^{\infty} \left(A_n r^n + \frac{B_n}{r^{n+1}} \right) P_n(\cos \theta) \quad (\text{A-26})$$

と解を与えることができる。 $(P_n(\cos \theta) \equiv P_{n0}(\cos \theta))$

ここで、 $P_n(\cos \theta)$ は、式(A-24)において、 $m=0$ とした式、

$$\frac{d}{d\zeta} \left((1-\zeta^2) \frac{dP_n}{d\zeta} \right) + n(n+1)P_n = 0 \quad (\text{A-27})$$

の解である。この式は、ルジャンドルの微分方程式と呼ばれ、
解として第1種および第2種のルジャンドル関数が得られ
る。ルジャンドル陪関数とルジャンドル関数の間には、

$$P_{nm}(\zeta) = (1-\zeta^2)^{\frac{m}{2}} \frac{d^m}{d\zeta^m} P_n(\zeta) \quad (\text{A-28})$$

の関係があり、 $P_n(\zeta)$ は、 ζ の n 次多項式で与えられるため、

$$m > n \text{ のとき、 } P_{nm}(\zeta) = 0 \quad (\text{A-29})$$

となる。

・学会誌11月号、式(102)から式(104)への導出過程

学会誌11月号本文の式(102)

$$\sum_{k=0}^{\infty} \frac{-(k+1)B_k}{R_0^{k+2}} P_k(\cos \theta) = -3U_{\infty} \cos \theta P_n(\cos \theta) - \frac{3}{2} U_{\infty} \sin \theta \frac{dP_n}{d\theta} \quad (\text{102})$$

にルジャンドル多項式の直交関係式、

$$\int_0^{\pi} P_n(\cos \theta) P_m(\cos \theta) \sin \theta d\theta = \frac{2}{2n+1} \delta_{nm} \quad (\text{103})$$

を適用して係数 B_k を決定するのだが、式(102)は、このま
までは、直交関係式を使えないため、以下のルジャンドル
多項式に関する漸化式を利用する

$$\cos \theta P_n(\cos \theta) = \frac{1}{2n+1} \left\{ (n+1)P_{n+1}(\cos \theta) + nP_{n-1}(\cos \theta) \right\}$$

$$\sin \theta \frac{dP_n(\cos \theta)}{d\theta} = \frac{n(n+1)}{2n+1} (P_{n+1}(\cos \theta) - P_{n-1}(\cos \theta))$$

この2式を用いると、

$$-3U_{\infty} \cos \theta P_n(\cos \theta) - \frac{3}{2} U_{\infty} \sin \theta \frac{dP_n}{d\theta}$$

$$= -\frac{3}{2} U_{\infty} \left[\frac{2}{2n+1} \left\{ (n+1)P_{n+1}(\cos \theta) + nP_{n-1}(\cos \theta) \right\} \right. \\ \left. + \frac{n(n+1)}{2n+1} (P_{n+1}(\cos \theta) - P_{n-1}(\cos \theta)) \right] \\ = -\frac{3}{2} U_{\infty} \frac{1}{2n+1} \left[(n+1)(n+2)P_{n+1}(\cos \theta) - n(n-1)P_{n-1}(\cos \theta) \right]$$

ゆえに式(102)は

$$\sum_{k=0}^{\infty} B_k \frac{(k+1)}{R_0^{k+2}} P_k(\cos \theta) = \frac{3}{2} U_{\infty} \frac{1}{2n+1} \left[(n+1)(n+2)P_{n+1}(\cos \theta) \right. \\ \left. - n(n-1)P_{n-1}(\cos \theta) \right] \quad (\text{A-30})$$

となる。この式の両辺にルジャンドル関数 $P_m(\cos \theta)$ を乗
じ、 $\sin \theta$ の重みをつけた内積をとると、ルジャンドル関
数の直交関係式(103)を用いることができ、

$$\text{(左辺)} = \int_0^{\pi} \left\{ \sum_{k=0}^{\infty} B_k \frac{(k+1)}{R_0^{k+2}} P_k(\cos \theta) \right\} P_m(\cos \theta) \sin \theta d\theta \\ = \frac{B_m}{R_0^{m+2}} \frac{(m+1)}{2m+1}$$

$$\text{(右辺)} = \int_0^{\pi} \left[\frac{3}{2} U_{\infty} \frac{1}{2n+1} \left\{ (n+1)(n+2)P_{n+1}(\cos \theta) \right. \right. \\ \left. \left. - n(n-1)P_{n-1}(\cos \theta) \right\} \right] P_m(\cos \theta) \sin \theta d\theta \\ = \frac{3}{2} U_{\infty} \left[\frac{(n+1)(n+2)}{2n+1} \delta_{m,n+1} - \frac{n(n-1)}{2n+1} \delta_{m,n-1} \right] \frac{1}{2m+1} \\ = \frac{3}{2} U_{\infty} \left[\frac{m(m+1)}{(2m-1)(2m+1)} \delta_{m,n+1} - \frac{m(m+1)}{(2m+3)(2m+1)} \delta_{m,n-1} \right]$$

したがって、

$$m = n+1 \text{ のとき： } B_m = \frac{3}{2} U_{\infty} R_0^{m+2} \frac{m}{2m-1}, \\ \therefore B_{n+1} = \frac{3}{2} U_{\infty} R_0^{n+3} \frac{n+1}{2n+1}$$

$$m = n-1 \text{ のとき： } B_m = -\frac{3}{2} U_{\infty} R_0^{m+2} \frac{m}{2m+3}, \\ \therefore B_{n-1} = -\frac{3}{2} U_{\infty} R_0^{n+1} \frac{n-1}{2n+1}$$

となる。この式は、 n 次の微小変形が球周りの流れと干渉
し、 $n+1$ 次と $n-1$ 次のポテンシャル流れを誘起している
ことを意味している。すなわち、 $r=R_0$ の球周りの
 $\Delta r = \varepsilon_n R_0 P_n(\cos \theta)$ の変形によって、式(104)で与えられる

$$\varphi_1 = \left[\frac{B_{n-1}}{r^n} P_{n-1}(\cos \theta) + \frac{B_{n+1}}{r^{n+2}} P_{n+1}(\cos \theta) \right] \\ = \frac{3}{2} U_{\infty} \left[-\frac{R_0^{n+1}}{r^n} \frac{n-1}{2n+1} P_{n-1}(\cos \theta) + \frac{R_0^{n+3}}{r^{n+2}} \frac{n+1}{2n+1} P_{n+1}(\cos \theta) \right] \quad (\text{104})$$

の流れが生じる。